〔監修〕
左京／紀田順一郎

海野十三全集

別巻Ⅱ
評論・ノンフィクション

三一書房

海野十三全集
別巻1　評論・ノンフィクション（第13回配本）

1991年 10月15日　第1版第1刷発行　Printed in Japan

監修者　小松左京
　　紀田順一郎
発行者　畠山滋
印刷所　日本写真印刷㈱
製本所　東京美術紙工
発行所　株式会社　三一書房
東京都文京区本郷2—11—3
電話 03(3812) 3131～5番
振替東京 9-84160番
郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　© 1991年
ISBN4-380-91540-9

評論・ノンフィクション——目次

I　ノンフィクション　9

赤道南下（抄）　11

基地にて　12

乗組員見習　21

警　報　27

出　撃　37

新作戦近し　49

警戒碇泊　63

軍艦旗の下に（抄）　77

作家の出陣　78

輸　送　船　80

変りゆく海　88

わが南洋群島　93

配属きまる　98

虫喰い算大会　103

改稿増補を終えて（米田麟吉）　104

自　序　105

1　虫喰い算とは？　106

2　やさしい虫喰い算とその解き方　107

3　高級な虫喰い算とその解き方　112

4　〝虫喰い算〟大会について　120

〝虫喰い算〟大会　121

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

麻雀(マージャン)の遊び方（抄） 153
麻雀インチキ物語 154
無線趣味十年 159
科学小説の作り方 187
人体解剖を看(み)るの記 207

II 科学解説 217

おはなし電気学（抄） 219
自序 220
電子の話 221
電気殺人の話 226
感電の話 235
電気殺人器械の話 243
電気怪火の話 256
私たちの面白い科学（抄） 263
フジサン ノ ハナシ 264
モクタンジドウシャ 265
ダイヨウヒン(ヘそ) 267
科学が臍(へそ)を曲げた話 271
成層圏飛行と私のメモ 277
ラジオは何処(どこ)へ行く 281

Ⅲ　エッセイ　289

人造物語　291
真夏の大衆科学陣　300
原子爆弾と地球防衛　303
未来の人間はどんなかたちになるか……　310
本格探偵小説観　318
探偵小説の批評について　319
探偵小説管見　323
科学探偵　325
原稿を書く場所　327
ネタ探しの話　332
深夜の東京散歩　333
或る日の日記より　336
探偵実演記　338
二つの身辺探偵事件　340
或る感電死の話　347
雪隠詰　356
パプア族の算術　360
虫太郎を覗く　362
虫太郎の追憶　364
蘭君に望む　365
『古井戸』の作者のこと　366

横山先生を仰ぐ 368
川原田政太郎博士 372
テレヴィジョン王・高柳教授訪問記 376
頑張れ若原選手 379
三重宙返りの記 381
徹夜麻雀 384
カメラ談義 385
カメラを扱ったスパイ小説 386
海と私の幼時 389
竹陵亭短信 390
病体手帳 392
『地球盗難』の作者の言葉 393
『十八時の音楽浴』の作者の言葉 398

Ⅳ 翻訳 403

大空にある地獄 405

Ⅴ 座談会 439

夢と現実を語る鼎座放談会 441
科学者ばかりの未来戦争座談会 467
解題〔横田順彌〕 487

評論・ノンフィクション——海野十三全集・別巻1——

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I　ノンフィクション

赤道南下（せきどうなんか）（抄）

基地にて

1

庭の方から、涼しい風が、この座敷へ吹き込んでくる。

扇芭蕉の葉が――あの巨人が手をひろげたような扇芭蕉の葉が、廂の向うで、たえずさらさらと鳴っている。

「惜しいね、銀が一丁手にありさえすれば、敵の王様は轟沈確実だがね」

将棋盤を距てて、私の前では記者の南部君が、毛脛をぴしゃぴしゃ叩いて口惜しがっている。

さっきからずいぶん念の入った大長考である。結論はついているのに、なお諦め切れないところが、それ、いとしい戦友同志の合戦、どっちが勝つか負けるか、こっちが負ければ相手に無性に嬉しがられる。それが癪だとあって、なかなか諦められない。

「ええと、ここから金打ちといっても……ああやっぱり詰ない」

南部記者は、いつになっても同じことをやっている。

私は、盤から目を放して、庭の方を見た。

薄っぺらな板を張った縁側には、まだ熟れない真青な色のパパイヤが二つ転がっている。坊主枕ほどもある大きいやつだった。

これは、二三日前この旅館の裏を開墾するとてパパイヤ林を伐り開いたとき、下に落ちたのを、今将棋で呻っている南部記者が拾ってきたのだった。そのとき彼は、その大きいパパイヤを三つも抱え込んで、縁側から上ってきたが、座敷へ上るなり、大きい声で、

（おうエルマン、パパイヤを切るから大きい包丁を持ってこい）

と宿のボーイの名を呼んでいいつけた。

エルマンは、艶のあるチョコレート色の膚を持った温和しい青年島民だった。漆黒の頭髪をオールバックになでつけ、白いスポーツ襯衣から筋肉の隆々たる肩を露わに見せている。そして下には真白な幅の広いパンツをきちんとはいている。

（このパパイヤは、まだ喰べられない）

若きエルマンは、包丁を持って来たが、そういった。
（なあに、喰べられないことがあるものか。どれ、包丁を貸してくれ）
といって、果実に飢切っている南部記者は、包丁を手に取直して、一番大きいパパイヤをざくりとやった。
（なるほど、こいつはまだ早いや。ああ損をした）
（……）
エルマンは、無表情で、包丁を縁側から拾い上げて台所へ行きかける。
（おうボーイ。いつになったら喰えるかね）
（三日のちか四日のちだね）
（明日喰べられるような方法はないか）
南部記者は無理なことをいう。
（そうだね。縁側へ出しておけば早く喰べられる。黄色くならないと駄目だ）
（ああそうか。じゃあ、ここへ並べて置くか）
というわけで、縁側にあのとおり残りの二つのパパイヤが並んでいるわけだった。
それ以来、彼は二時間置きぐらいに、そわそわと縁側へやって来ては、パパイヤを手にとって、裏表をひっくりかえして見るのだった。だが、そのパパイヤは、いつまで経ってもなかなか黄色くならなかった。
今も二つのパパイヤは、尻を南部記者の方に向け、なかなか黄色くなってやらないぞ、と意地悪く構えているように見えた。私はふとおかしくなって、目をパパイヤから放すと、南部記者の方へ移した。
彼は、火の消えた煙草を指に挟んだまま、むずかしい顔でまだ考え込んでいる。
そのとき玄関にどやどやと足音がして、私たちを呼ぶ声がした。

2

「おう、みんないるか。海野さん、南部くん」
玄関を上って廊下がどんどん響く。叩きつけるような太い声の主は、ニュース・カメラマンの田方君だ。
それに甲高い別の声がおっかぶさって、
「やあ、またヘボ将棋で対戦中か」
と、これは写真班の芦田君。
私と南部君は、盤面に張りつけられたようになって、ううと生返事を発したばかり。
「おいおい、センセにトノサマ。将棋なんか楽しんでいる場合じゃないぜ」
と田方君は、得意の嚇かし口調。センセは私の渾名、

トノサマは南部君の渾名である。
「皇国の興廃此の一戦に在り。ちょっと静かにしておろうぞ」
とトノサマが、横に払う。
「その、此の一戦に在りだよ。おれたち第一班四名は、直ちに○戦隊へ乗れという命令だ」
田方君の声に、さすがの私と南部君も、盤面から目を放した。
「直ちに○戦隊へ乗れってか」
「○戦隊というと軍艦○○のクラスじゃないか。作戦の方面は、どこかな」
と、私たちは問いかえしながら田方君と芦田君の顔を見上げたが、愕いたことに二人とも、ちゃんと背中にリュックサックを負い、出発の支度を整えて立っているのだった。
「おう、早く支度をしなよ。司令部の○○参謀は、即時乗組めといそいでいたぞ」
温和しくて慌てたことのない芦田君が、いやに私達を急がせる。
私たちは目を見合わせた。そして号令をかけたように立上った。
浴衣を脱ぐ間も遅しと足で蹴とばす。
越中褌の上に縮みの襯衣の上だけをひっかぶり、その上につんつるてんの防暑服をつけ、白い半靴下をはくと、それでもう服装は整った。
防暑服の左腕には赤地に白ぬきの派手な腕章、その文字は「海軍報道班員」とある。この腕章をつけて、どんどん第一線へ出ていくのが、私たち「海軍報道班員」の誇りであった。
私のリュックは、部屋の隅っこに転がっている。リュックの口をあけて、浴衣をくるくると巻いて入れる。歯磨、楊枝、石鹸函、タオルを大急ぎで放り込む。廂の下に吊って乾かして置いた越中褌を取り込み、これも丸めて投げ込む。そこでリュックの口をしめる。
壁にかけてあった水筒を左肩にかけ、同じく写真機を右肩にかける。同じく白いヘルメットを阿弥陀に被る。
「これは駄目だ。もう詰んでいるよ」
と頓狂な田方君の声。
ふりかえると、私たちに替っていつの間にか田方君と芦田君が将棋盤を挟んで対峙している。
「おれもね、どうもへんだなあと思っていたんだ。この歩を桂馬で取って必死だろう。やっぱり詰んでいるんだ」
「なんだ、つまらねえ」
「つまらねえが、詰んでいるんだ」
出動の準備勇ましく乗り込んできたお二人さんは、寸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com